瀬戸内晴美

ひとりでも生きられる

いのちを愛にかけようとするとき

《青春愛蔵版》

青春出版社

ひとりでも生きられる

瀬戸内晴美

青春出版社

著者紹介

作家。大正11年徳島生まれ。昭和18年東京女子大学国語専攻部卒。在学中に結婚したがのちに離婚。『女子大生・曲愛玲(チュイアイリン)』で昭和31年度新潮同人雑誌賞，昭和35年『田村俊子』で第1回田村俊子賞，『夏の終り』で昭和37年度女流文学賞をそれぞれ受賞した。

モラルの枠を越えて，自分の心に忠実に生きようとする女の愛の姿を数多く描き，独自の境地を開花させ，女性の深奥な内面を鋭く捉える作風はエッセイにも十分うかがわれる。『愛の倫理』（当社刊）『京まんだら』『恋川』など多数。

ひとりでも生きられる
——いのちを愛にかけようとするとき——

昭和四十八年三月十五日　第一刷
昭和四十八年六月十五日　第七十四刷

著者　瀬戸内晴美
発行者　小沢和一

発行所　株式会社　青春出版社
〒162　東京都新宿区若松町73番地
振替番号東京九八六〇二番
TEL（203）五一二一～九

検印を廃す

★この本をお読みになったご意見ご感想を編集部までお寄せ頂ければ幸いです。

印刷・堀内印刷　製本・大口製本

0000-205600-3822

© PUBLISHING SEISHUN Co., Ltd. 1973

著者近影

写真提供：中央公論社

愛する人の腕の中で死にたいと願い、愛する人を自分の腕の中で逝かせたいと思うのは、愛の究極のエゴであり、最も強い愛の証しの心情ともいえる。

女は、恋をするなら自分をほろぼしてしまうまで情熱を燃やしつくす恋をすべきである。

結婚の形態をとらないでも、女は子供を産めるし、育てられもする。妻の座と金をほし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

からない、自立した女たちが、もっともっと世の中にあえてくるとしたら、要の座ほど空虚ではかないものはなくなるだろう。

別れたあとでなつかしがられる女になろうとするより、現在なくてはならない女になることが、女にとっては幸福なのである。愛とは現在にしかないものだ。

瀬戸内晴美

国書刊行会

口絵撮影・林忠彦

はじめに——命をかけて愛そうとするとき

●女が想い込んでいるもののすべて

ここにおさめられたエッセイは、十年にわたる歳月にいつのまにか書きためられていた私の愛についての想いである。

今改めて読みかえしてみて、私が愛について、頑固に信じぬいてきた一つの核があることに気づかされた。それは妻であろうとしない女、あるいは妻であることを自ら放棄した女が、男を愛する場合、それを支える命綱は「情熱」しかないということである。

妻が夫との愛を支えぬくのは忍耐であるといわれる。しかし私のような妻でない女が恋人との愛を守り通すのは情熱以外にはない。

今、好むと好まざるにかかわらず、女たちの中には妻であろうとしない女が、年々に増えているし、妻であることから脱却しようとする女も増えている。その上、妻にはならずに、母になりたいという女も増えている。

一夫一婦制も根底からゆらぎはじめている。そんなことはないといい切る人の無神経さと鈍感さは、もはや時代遅れになりかかっている。

妻であろうとしない女たちも愛なくしては生きていけない。それなら彼女たちは、どんな愛のかたちを需め、どんな愛を守ろうとするのだろうか。

五十年を生きてしまった私の愛への確信は、人は別れるために出逢うという一語につきる。それは人が死ぬために生まれてきたのと同じ冷酷さで人間の運命に課された劫罰であると同時に恩寵でもあるように私には思われてきた。

もし、永遠に滅びない生命があったら、それは何という苦しいことだろうか。もし、永遠に衰えない恋があったら、それは何という刑罰であろうか。滅びる約束があるからこそ、一日一日が惜しまれなつかしいのであり、衰えることわりに支えられているからこそ、刻々の愛がきらめくのである。

私は少くともこれまでの生涯、自分の情熱だけはいつわらず正直に生きてきたといえる。それが正しかったかどうかは私は知らない。こういうふうにしか生きられない人間だったから、この道を選んだのだとしかいいようがない。

しかし、私は、万巻の書からよりも、何百人の人の意見からよりも、自分自身の迷い多いつまづきつづけの恋そのものから、最も多くの生の歓びと悲しみと人間のあわれといとしさのすべてを教えられてきたと思っている。

多くの恋の途上で、傷つけもし、傷つけられもしたが、男女の恋の決算書はあくまで五分(フィフティー)五分(フィフティー)であったという結論に、今は到達した。

人間は人間を決して救うことは出来ないし、ゆるすことも出来ない。けれども人間は人間を思いやることは出来る。他人の悲しみを悲しみ、他人の喜びを喜ぶことは出来る。その心のひろがりがもたらされるのは、真剣な恋と思い悩んだ心の闇の涯にほの見えてくる光明の中からである。

人は人を愛していると思いこみ、実は自分自身だけしか愛していない場合が多い。

捨身飼虎(しゃしんしこ)ということばがあるが、そんな自己犠牲の愛は、神か仏の愛であろう。しかし、人は人を命をかけて愛そうとする時、束の間であっても捨身飼虎の法悦の境地をかい間覗き見る瞬間がある。それはたといはかない幻にすぎなくても、一瞬でも見ることの出来た者の方が、まったく覗き得ずに死んでいく人よりは幸せではないだろうか。

私は人の恋の永遠を信じることは出来ない。しかし人の恋は愛に育てることができて、その愛はもしかしたら永遠を約束してくれるものかもしれないと思うようになってきた。

恋を得たことのない人は不幸である。

それにもまして、恋を失ったことのない人はもっと不幸である。

多く傷つくことは、多く愛した証しである。
繰りかえしいおう。
人は死ぬために生まれ、別れるために出逢い、憎みあうために愛しあう。それでもこの世は生きるに価値あり、出逢いは神秘で美しく、愛はかけがえのない唯一の真実であることにまちがいはないようだ。
多く愛し、多く傷ついた魂にこそ浄福を。

瀬戸内晴美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目

次

はじめに——命をかけて愛そうとするとき ……5
●女が想い込んでいるもののすべて

前章 女が生涯に一人の男を愛するとき ……17
描かれた私の数奇な半生 17
八年間一度も気づかなかった自分の行為 20
二十五歳の人妻の二十一歳の青年への初恋 23
皮膚で確かめたもの以外は信じられない 26
しがみつき合った絶望の男と女 29
私が経験した日々 31
情婦や恋人でもない、妻でない妻 34
ずっしりと私の前に坐った巨大な怪物 36

本章1 男の前を裸になって横切れるか ……39
恋人と裸で寝られないくらいなら 39
相手が私を愛さなくなったら 42
女が悔いなく生きるなら 46

本章2 〝女を生きたい〟実感が欲しいとき ……49

目　次

ひとりの男の目だけを頼りに生きるとき　49
自分が需められたいと想うとき　51
情事と恋人を別に考えるとき　55

本章3　愛を需める女、需められる女……59
願望に火をつけられた因果の女　59
自分の運命を狂わせ、男の平安を破ってきた女　63
身ぐるみ裸にされて恋を得た女　66

本章4　どんなに軀を合わせても一つにならない…69
夫がベッドの中でもらした意外な告白　69
手を切ろうとして切れない夫の心の中　72
辛い別れの時が必ず自分を待っている　74

本章5　自分のしるしを刻みつけたい人は……79
未知を欲しがる期待の底には　79
自分の死をゆだねられる人は　82
出逢いが自分に思い知らすものは　86

自分が心を震わせて待ち望む出逢いは 90
本章6 今、なくてはならない女になるべきだ……93
男の言葉によって納得させられてしまうとき 93
別れは必ず理不尽に襲いかかるものだ 96
別れの覚悟を心にたたみ込んで逢うべきだ 99
本章7 自己愛の醜さをさらす女心……102
取り乱してしまう信じられない気持 102
泣きわめき、惑乱する突然のショック 104
自己愛をさらす凄絶な闘争 108
本章8 自負する女は盲想に嫉いて狂乱する……112
究極は自分が可愛いのである 112
男は女に金をかけるほど離さない 114
愛する人に買ってあげるのは快楽である 118
本章9 男との生活を断ち切ろうとする心の中……122

情熱はたやすく焔の輝きを失う 122
私は花になるより蝶になりたかった 125
情熱という鬼火が消えはてない限り 127

本章10 心の奥底にかくされた男と女の結びつき……131
男との恋に生きる女のタイプ 131
心を奪われたら夢中になる奔放なタイプ 134
男も女も同時に二人を愛せる 137

本章11 女の中に眠っていた才能……140
女が自分の生を生きるには 140
泥中の蓮平塚らいてう 143
通念に切りこんだ〝男を可愛がる女〟 145
家をふり捨てなければならない女の闘い 147

本章12 女が男を深く恋する方法……150
年上妻の誇りがあふれる情念 150
はげしく燃える嫉妬の執念 153

精神から肉体までも若がえらせる恋 157
本章13 男と女の立場はある瞬間にかわる……160
相手を自分の想いどうりに得て愉しむ 160
自分の計画の怖ろしさにひるむ女 163
女が男に感じる恐れと不安 165
生きている実感を与え合う関係 168
互いに傷をなめあう獣の目のやさしさ 170
本章14 男に頼らず生きようとする女の愛し方……173
自分で産む決心をつける自由な女 173
男と女が白熱の愛をかわすとき 176
自分にいいきかせてきた女のせめてものつぐない 180
本章15 女が男を見限ってしまう理由……182
男優位にある男女間のモラルは 182
自分の産んだ赤ん坊への本能的快楽 185
娘たちがぼやく不甲斐ない男の子 188

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.